

校長通信

Morifun

<卒業に寄せて>

いよいよ明日が卒業式です。コロナ禍のため、これまでと同様に規模を縮小しての式となるため、在校生の出席者は生徒会執行部のみとなります。本当に残念なことです。ただ今回はコース代表ではなく一人ひとりに証書を授与することにしています。その際には原則マスクも外してもらいます。卒業生はマスクをして入学し、ほぼ 3 年間マスク生活を続けてきました。私にとっても最初で最後の素顔を見ることができる瞬間です。コロナのために色んな行事が中止になった世代です。でも、その苦しさや悲しさを克服して巣立っていく、コロナに負けなかった世代の一人になってほしいと切に願っています。在校生一同で三年生の晴れの姿を見送りたいところですが、どうか心の中で旅立つ先輩にエールを送ってください。

Bon Voyage!



<卒業式にまつわるエトセトラ>

私自身、小中高大と 4 回卒業式を迎え、それぞれの場所を巣立っていった。それぞれに思い出があり、時には懐かしき思うこともある。因みに幼稚園の卒園式がないのは、生徒会誌『学園』を読んで欲しい。そして学校の教員となり、今年度を含め 42 年間の高校教員生活の中で、途中教育委員会に 6 年間勤めたので、都合 36 年間卒業生を送り出してきたことになる。改めて計算してみるとクラス担任としては 6 回呼名をし、校長として式辞を 8 回 (今年度も含めて) 読んだことになる。それぞれに忘れられない思い出がある。

思えば教員になって初めて担任として卒業式を迎えたとき、緊張マックスであった。そこに追い打ちをかけるように卒業生が 1 人登校途中で事故に遭い急遽欠席、大丈夫だろうかと心配するあまり、呼名を 1 人飛ばしてしまうハプニング。式が終わってから平謝りしたが、当の生徒は「お陰で忘れられない卒業式になりました」と慰めてくれる始末。なんて大人の対応なのだ、しかし保護者はどう思っただろう、それを口にする则「大丈夫です。両親ともに忙しくて来ていませんから」ホッとするとより逆に何か落ち込んでしまう自分がいた。確かに昔は保護者が二人揃って出席するのは珍しく、欠席する親もいたのである。それでも生徒は立派に巣立っていく。

最後に担任をしたクラスは小規模校だったので、当時 40 人学級が標準 (公立高は現在もそうだが) であったが、卒業生は 30 人程度であった。2 クラスだから全部で 60 人という感じ。この年の卒業式は校長先生が新任で、でもいつも悠然としている方だったので緊張感はなく伝わってこなかったのだが、式辞を読む際に、礼をした時に額をマイクにぶつけてしまい結構な音も、「ああ、やってしまった」と思って生徒たちを見ると、60 人の卒業生たちは必死に笑いをこらえているではないか、思いやりのある子どもたちだなと何か心が温まった気がした。式が終わりクラスで改めて最後のホームルーム。実は私はそ

れまで卒業式で泣いたことは一度もなかったのだが、何故かその時は彼らの優しさに感極まったのか、3 年間の色んなことが走馬灯のように巡って、話の途中で思わずホロリ。それまで勤務していたのは 1 学年 8~10 クラスの大規模校で、このこじんまりとした中にもアットホームな感じがあったせい、さらには学年長も兼ねていたもので、余計一人ひとりの顔が浮かんでしまったせいかもしれない。その夜に『卒業を祝う会』なるものが催され、ある保護者から「鬼の目にも涙ですね」と冷やかされ、「何か急に花粉が飛んできましたね」と誤魔化した始末。

校長になってからはマイクに頭をぶつけないよういつも気をつけている自分がいる。若い頃から体育教師として間違われることが多かったせい、式辞の中に英語の一節を入れてしまう自分もいる。でも素敵な言葉なので原語で伝えたいのである。今までの一部を紹介する。

Life is like a box of chocolate. You never know what you're gonna get. 「人生はチョコレートの箱のようなものだ。開けてみるまで分からない」これは映画「フォレスト・ガンプ」からの引用で、目の前にあるのは厳しい混沌の世界かもしれないが、怯んだり、躊躇したりすることはない。待ち受けるのはあなた自身の人生なのだから恐れずにチャレンジしてほしい、という意味を込めた。

It is not where you start but how high you aim that matters for success. The greatest glory in living lies not in never falling, but in rising every time we fall. 「成功するために大切なのは、どこから始めるのかではなく、どれだけ高く目標を定めるかである。」「生きるうえで最も偉大な栄光は、決して転ばないことにあるのではない。転ぶたびに起き上がり続けることにある。」これは国家反逆罪で 71 歳という年齢で釈放されるまで 27 年もの長きにわたり収監されながら、決して屈することなく、アパルトヘイト政策の撤廃に生涯を捧げ、南アフリカに和解と融合そして自由をもたらしたネルソン・マンデラの言葉である。

さて、明日の言葉は次号で伝えようと思います。

卒業生各賞受賞者

各賞の受賞者の皆さんです。それぞれ文武両道の実践に取り組みました。おめでとうございます！（敬称略）

理事長賞	畠山 響
日本私立中学高等 学校連合会会長賞	佐藤 真将
功労賞	中居 早瀬 相場 啓吾 勝田 隆暖 菊地 悠希 山田 煌晟 石綿 温人 佐々木 康太 外浦 風汰 榮 真智 天瀬 海斗
答辞・記念品贈呈の辞	中居 早瀬

<礼拝より> 花巻教会牧師・鈴木道也先生

新約聖書 マルコによる福音書 15章 39節

今日は『馬槽のなかに』（『讃美歌 21』280 番）という賛美歌を皆さんに紹介したいと思います。作詞者は由木康さん、作曲者は安部正義さんです。日本で作られた代表的な賛美歌の一つで、私も大好きな賛美歌です。この賛美歌の特徴は、イエス・キリストの「生き方」にスポットを当てている点です。

たとえば、2 番はこのような歌詞でした。《食するひまもうちわすれて、／しいたげられし ひとをたずね、／友なきものの 友となりて、／こころくだきし この人を見よ》。

《この人を見よ》の《この人》とは、イエスさまのことです。食事をするひまも忘れて困っている人を訪ね、友のいない人の友となってくださった、そのように他者のために懸命に生きたイエス・キリストのお姿が謳われています。

3 番では、イエス・キリストがどのような最期を遂げたかが語られています。3 番《すべてのものを あたえしすえ、／死のほかにも むくいられで、／十字架のうえに あげられつつ、／敵をゆるしし この人を見よ》。

イエスさまは様々な誤解や、妬みや誹謗中傷を受け、最後には十字架刑によって殺されてしまいました。他者のためにご自分のすべてを与えたイエスさまでしたが、返って来たのは、十字架の死でした。その意味で、報われること

のない、悲しい最期を遂げられたのだと言えます。しかし、十字架刑に処せられたとき、イエスさまは《父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです》と言い（ルカによる福音書 23 章 34 節）、人を恨むことはなさなかったと伝えられています。

『馬槽のなかに』を作詞した由木康さんは、牧師をしておられた人です。由木先生が『馬槽のなかに』の原型となる詩を作詩したのは、まだ若い、27 歳のときでした。由木先生はそのとき、キリスト教の信仰に対して確信が持てなくなり、思い悩んでいたそうです。ご自分の信仰が揺らいでいた時期であったのでしょうか。そのような中、「一人の人間として生きた」イエス・キリストの姿に想いが向かうようになり、他者のために生涯をささげた、イエス・キリストのその「生き方」の中にこそ、神さまの愛が示されていることに思い至ったそうです。その新たな確信と喜びの中で生まれたのが、この『馬槽のなかに』です。

『馬槽のなかに』は次の詞で締めくくられます。4 番《この人を見よ、この人にぞ、／こよなき愛は あらわれたる、／この人を見よ、この人こそ、／人となりたる 活ける神なれ》。

《この人》とは、イエス・キリストのことです。この一人の人間であるイエスさまの内に、神さまの愛は完全な方たちで現れている、と 4 番は謳います。

3 年生の皆さんはこの 3 年間、さまざまな機会に聖書の言葉に触れてきたと思います。心に残っている聖書の言葉もそれぞれにあることでしょう。私としては、イエス・キリストの生き方と、そこに現れている神さまの愛について、皆さんに自分なりに伝えてきたつもりです。キリスト教の信仰を持つ・持たないを超えて、聖書が伝える愛を、これからも心に大切にとどめていってもらえたら嬉しいです。

（1 月 24 日）

新約聖書 ヨハネの手紙一 4 章 16 節

今日も賛美歌を 1 曲皆さんにご紹介したいと思います。『主われを愛す』（『讃美歌 21』484 番）という賛美歌です。子どものための賛美歌で、日本でも最も知られている賛美

歌の一つです。海外から日本に来ている宣教師の皆さんが 1872 年（明治 5 年）に開催した会議の中で、日本語に訳す賛美歌として最初に提案された 2 曲の一つが、この『主われを愛す』であったそうです。明治期に日本に伝わった最初期の英語の歌の一つと言えるでしょう。

1 番はこのような歌詞です。《主われを愛す、主は強ければ、われ弱くとも 恐れはあらし。わが主イエス、わが主イエス、わが主イエス、われを愛す》。私たちの住む日本では長らく、この文語訳で親しまれてきました。

「くりかえし」の《わが主イエス、わが主イエス、わが主イエス、われを愛す》は、もともとの英語の歌詞では、《Yes, Jesus loves me! Yes, Jesus loves me! Yes, Jesus loves me! The Bible tells me so》となっています。《The Bible tells me so（聖書がそう伝えている）》の部分が日本語では省略されていることが分かります。イエスさまは、私たち一人ひとりを愛している——私たちがそう言っているだけではなくて、他ならぬ聖書が、そう伝えている。これは、大切なメッセージですね。この英語の歌詞のニュアンスを生かし、新しく作られた口語訳では《聖書は言う、イエスさまは 愛されます、このわたしを》と翻訳されています。（では、『主われを愛す』の 1 番を、文語訳、英語、口語訳で歌ってみたいと思います♪）

神学者のカール・バルトという人がいます。膨大な量のキリスト教についての論文を書いた人です。あるとき、彼はインタビューで、「あなたの膨大な著書はひと言で要約したらどうなりますか」と聞かれ、《Jesus loves me! This I know, For the Bible tells me so》と『主われを愛す』の冒頭を歌い、「これがすべてです」と答えたそうです。「イエスさまは私を愛している、わたしはそれを知っている。聖書がそう言っている」、確かにこれが、聖書の中心的なメッセージですね。

イエスさまは私を愛している、だから私も神を愛し、そして隣人を愛する。聖書が語るこの愛を、皆さんも日々の生活の中で心に留めてもらえれば嬉しいです。

（2 月 7 日）